

ウブな契約妻は過保護すぎる社長の
独占愛で甘く囚われる

第一章

もうすぐ四月。

桜が咲き、お店のディスプレイや、棚に並ぶ商品にもピンク色の物が増えて胸が弾む。

私はこの季節が大好きだ。

仕事がいっつも以上に楽しく、つい鼻歌が出てしまいそうになる。

「宮本さん、その清掃が終わったら話があります」

普段より明るい気分で会議室の清掃をしていると、清掃部の野崎マネージャーから声をかけられた。

「わかりました」

マネージャーから個別で呼び出されることなんてほとんどないのに、一体どうしたんだろう。

私は少し不安を抱えながらも仕事を終え、清掃員の控室に併設された個室に入った。野崎マネージャーとテーブルを挟んで向かい合う。

「宮本さんは本当に一生懸命働いてくれるから助かっています」

「ありがとうございます。そう言っただけで嬉しいです」

そう答えたものの、褒めるだけのためにわざわざ呼び出しをするだろうか？ 何かミスをしてしまったのだろうか？ 心配になりながら、緊張した面持ちで彼女に視線を向ける。

「実は、来月から社長室の清掃担当をお願いしたいと思っています」

「えっ!? わ、私ですか？」

「ええ」

驚く私に、野崎マネージャーは満面の笑みを向けた。まさか重要な場所の清掃を私に任せてくれるとは……

私が働く『カワラ食品』は二年前に先代の社長が亡くなり、今の社長が三十歳という若さで後任となった。彼が就任してから業績は今まで以上に伸びたが本人の評判はあまりよくなく、社員達が『強面無表情社長』と噂しているのを聞いたことがある。

当然ながら社長と私に接点はなく、会話をしたこともない。

遠くから姿を見たときは、背がかなり高く身体ががっちりしていて、まるで格闘技でもしているのではないかという体躯だった。

私が一五三センチと小柄だから余計に大きく見えただけかもしれない。

噂を鵲呑みにするべきではないが厳しそうな印象だった。

仕事を評価してもらえないのは非常にありがたいが、社長室には大事な書類だつてあるだろうし、もし大切な物を壊してしまつたらと考えると不安が胸を支配する。気が進まない……

宮本ゆめ二十二歳。

私は東京にある『カワラ食品』の本社ビルで清掃員の派遣社員をしている。

『カワラ食品』は一九三〇年に創業、味噌の製造から始まり、今は食品全般に業務を広げている。

さらに、最近では日本全国で飲食店を展開しているだけでなく海外にも店舗を拡大し、社員数は二千人を超える。

私は創業者一族の近所にたまたま住んでいた。

祖母の話によると、もともとは庶民的な地域だったが、『カワラ食品』が大成功し工場を作ったことで、移り住んでくる人が増えたらしい。

創業者一族は、地元住民からは特別扱いを受けている。彼らのことをまるで殿様だと言っている人も多い。それだけ地元根ざしてお金を落とし、企業として町を発展させてきたのだ。

自宅には高級車が何台も停まっているとか、外国から有名人を呼んで大々的にパーティーをしているとか、創業者一族のことはよく耳にしていた。

私は築年数が古いアパートに住んでいるが、土地名を言うところ『すごいところに住んでいるんだね。セレブなんだ』なんて言われることも少なくない。

たまたま住んでいたら周りがすごいことになってしまっただけなのに。

しかし、ここ最近カワラ食品によって土地が買われているらしく、そのうち我が家も立ち退きにあうかもしれない。

「契約社員になればシフト管理などの事務仕事も必要になるんですけど、その分ボーナスが出て給料もアップしますよ。社会保険もしっかりしているし」

迷っている私に、野崎マネージャーが笑顔で説得してくる。

社長室や副社長室、役員フロアなどを担当する清掃員はカワラ食品の直接雇用となり、経済的にも安定する。

清掃員の契約社員は全部で三名。そのうちの一人が結婚退職するため、私に声をかけてくれたらしい。

社長室の清掃は私にはプレッシャーが大きい。せつかくの話だが断ろうと思っていたのに、お金のことを言われると心が揺らぐ。

うちはかなり経済的に不自由をしている。

私が十歳のときに両親が事故で他界し、祖母の家で育ててもらった。祖父とは、母が幼い頃に離婚したそうで、私には記憶がない。

一般的なサラリーマン家庭だったが、両親が亡くなってから父が友人の借金を肩代わりしていたことが発覚。遺産や保険金は借金返済に当てられ、祖母と二人で余裕がない生活を送ってきた。

私が高校生の頃、祖母は足腰が弱って車椅子生活になった。

役所の職員からは施設に入所させることを勧められたが、可愛がってくれた祖母への恩返しだと介護は私があると決めた。

そして、介護に時間を割くために始業が早く、昼過ぎには家に戻れる仕事を選んだ。

ヘルパーさんの力も借りて、仕事に家事に介護に大変な毎日だった。それでも大好きな祖母と一緒に過ごす時間は幸せで、この生活を長く続けていきたいと思っていた矢先、祖母が病気を患い入

院した。

しっかりとした保険に入っていなかったこともあり、制度を使っても医療費の負担が大きく、清掃の仕事の他に、夜は居酒屋でアルバイトをすることになった。

ところが睡眠時間を削って仕事をしていたせいで、家に戻ってくると体力は限界だった。

その上、祖母が入院中とはいえ病院に着替えを届けたり、役所に通ったり、ケースワーカーと相談したり、以前にも増して忙しくなった。病院から急遽呼び出されても、十分な対応ができなかったこともあった。

誰かに頼らなければ今度は私が倒れてしまう。

しかし、祖母が家族と呼べるのは私しかない。

祖母には姉がいたがすでに亡くなっていて、血がつながっている親戚といえば北海道に住んでいる祖母の姉の娘、夏江おばさんしかいなかった。ただずっと連絡を取っておらず親戚といっても形だけのものだった。

困り果てた私は仕方がなく夏江おばさんに電話し、祖母の面倒を見てもらえないか頼んだのだ。

『うちに面倒を見てもらいたいですって。』

電話口から返ってきたおばさんの声は、ものすごく嫌そうだった。しかし後ろからおばさんの娘らしき声が聞こえてきた。

『しっかりとお金をもらって面倒を見てあげれば？』

『そうね。うちも生活が大変だから、毎月十万円は仕送りできる？ あと医療費もかった分は請

求させてもらいます。それができるなら迎えに行つてあげるけれど』

私はその条件を呑むしかなかった。

そして、祖母の体調が比較的落ち着いている間に迎えに来てもらい、北海道へ見送つたのだ。

『ゆめ、幸せになりなさい。真面目に働いていたらきつといいことがあるわよ』

最後に会つた祖母がかけてくれた言葉が今も耳に残っている。

そばにいてあげられなかったのは申し訳ないが、今の私にできるのは祖母が元気になることを願ひながら一生懸命働くことだ。そんな思いで仕事に励んだ。

祖母が北海道に行き、時間的に余裕ができたことでもう少しシフトを増やしてほしいとお願いすると、派遣先が変更になった。それが現在の職場である『カワラ食品』だ。

一人になって孤独を感じていたけれど、『カワラ食品』の創業のきっかけとなった味噌の大ファンだったので、救われた思いだった。

祖母は私が元氣のない日には『カワラ食品』の味噌で、味噌焼きおにぎりを作つて励ましてくれた。私にとつては特別な思い入れのある会社だ。

派遣社員という形でも、その会社に関われるだけですごく嬉しかったが、まさか社長室の掃除をするなんて予想もしていなかった。

「どうしますか？ おばあ様のこともありますし、宮本さんにとつても悪くない話かと思つて。夜も居酒屋でお仕事されていますよね。契約社員なのでアルバイトすることも問題ありません」

事情を知っている野崎マネージャーが、最後のたたみかけとばかりに続ける。

祖母について言われたらもう断ることなんてできない。

「引き受けさせていただきます」

せっかく声をかけてくれたのだし、祖母と一緒に暮らすための貯金を増やすためだと思つて精一杯頑張りたい。

「よろしくお願いします」

野崎マネージャーは安堵したように明るい声を出した。

引き受けたからにはしっかり働こう。

社長が出勤する前に掃除をパパッと済ませてしまえば問題ないだろう。そうすれば顔を合わせることもないだろうし。

「それで、注意事項があるのですが」

「何でしょうか？」

「就業時間中は来客も多いから入室は避けてほしいそうで、朝の始業時間前に清掃をお願いしたいんです。たいいてい社長は早く出社されているから」

予想外の言葉だった。

「社長と顔を合わせる……つてことですね」

「そういうことです」

私の顔は引きつっていたに違いない。

冷静に考えてみれば、重要な場所に清掃員だけが入るのはセキュリティ上よくないので仕方が

ない。

「あとね、申し訳ないんですけど、本来であれば前任者が引き継ぎを行うんですが、急な退職だったから時間がとれなくて、初日から一人で行ってもらえるかしら？」

「だ、大丈夫でしょうか？」

「ええ。仕事の内容は私からしっかりとお伝えしますし、宮本さんになら安心して任せられるわ」「頑張ります」

一度了承したことを断るなんて、私にはできなかった。

*

四月一日。初めて社長室を清掃する日がやってきた。天気は良好。

窓を開けて部屋に新鮮な空気を取り込み、鏡を覗き込んだ。

背中まで伸ばした黒髪をポニーテールにして気合を入れる。

昨日の夜はなかなか寝つけず、そのせいで目の下にクマができていたのでファンデーションでカバーした。

『強面無表情社長』と噂される社長と顔を合わせるだなんて、考えるだけで緊張する。でも、仕事だからしっかりと頑張ろう。

「行ってきます」

覚悟を決め、写真の両親に手を合わせてから家を出た。

清掃員の朝は早い。八時には職場に到着し準備を始める。

仕事中に邪魔にならないように、部署内の清掃は社員が出勤してくる前に済ませなければならぬ。

各部屋のゴミ箱をチェックし、綺麗な状態にして社員の皆さんが気持ちよく働けますようにと、心を込めて掃除をする。

社長は八時半頃に出勤してくるらしく、そのタイミングで社長室の掃除をすることになっていた。廊下の掃除をしながら腕時計を確認する。もうすぐ八時半になるので社長室に向かう。

(……うう。緊張するよ)

心臓が早鐘を打ち、手の汗もすごい。

社長室の前に到着する。

ドアをノックして中に入ろうとするが、緊張して手が止まってしまう。

(大丈夫。笑顔で、余計なことを言わないで、ちゃんと掃除をしてくれば大丈夫)

心の中で呪文のように何度も繰り返して深呼吸をしてから、勇気を出してノックをした。

「はい」

低い声で返事が聞こえてきた。

「清掃の者ですが、入室させていただいてもよろしいでしょうか？」

「どうぞ」

「失礼いたします」

おそるおそるドアを開けて中を見ると、背もたれの高い椅子に腰をかけパソコンに向かっている姿が目に見えた。

河原誠社長、三十二歳。

近くで見るとやはり迫力がある。仕立てのいいスーツを着て、光沢のあるグレーのネクタイを締めていた。

無表情で画面を見つめている。

しっかりと固めた黒髪に、太めの眉毛と鋭く細い目。強面と聞いていたけれど、むしろ端正な顔立ちだ。いや、整いすぎているせいで怖く見えるのかもしれない。

そんなことを考えていると、社長がおもむろに私へ視線を動かしてきた。

「何か顔についているか？」

「い、いえ、本日から清掃を担当させていただきます、宮本と申します。気になることやリクエストがございましたら、何でもおっしゃってください。十五分ほどお時間をいただきます」

「よろしく」

朝の爽やかな光が差し込む社長室は静まり返っていて、社長がパソコンのキーボードを叩く音だけが響いていた。

その中で私は淡々と掃除をしていく。まずはゴミ箱の中身を捨てる。そして窓の埃を取ろうと、窓際に向かう。窓際にはサンスベリアなどの観葉植物が置かれていた。緑が鮮やかでも健康そ

うに見える。

「こちらにお水をあげましょうか？」

「そこは触らないでくれ」

「かしこまりました」

大事な植物だったのだろうか。事情もわからずおせっかいを焼いてしまった。

怒らせてしまったのではないかとこっそり社長の顔を確認するが、表情を変えることなくパソコンに向かって仕事をしていた。

こんなに緊張感がある中で仕事するのは初めて……。それでも与えられた業務なので私は心を込めて取り組んだ。

掃除をしていると、部屋の空気が新鮮なものに変わっていくのを感じる。

この空間に置いてある物達が『綺麗にしてくれてありがとう』と喜んでいる気がするのだ。

子どもの頃はあまり掃除が好きではなかったが、この仕事を始めてから掃除をするのが楽しくてたまらない。

仕事中だけではなく、自宅に帰っても部屋を綺麗にするのが趣味になりつつある。

ふと視線を感じて振り向くと、社長がこちらを見ていた。

「いかがなさいましたか？」

もしかしたら何かリクエストがあるのかもしれない。

「いや、楽しそうに仕事をしているなと思って」

「はい！ とても楽しいです」
「そうか」

ほんの少しだけ社長の表情が和らいだように見えた。気のせいかな？
その後は何事もなく清掃を進め、あつという間に時間が過ぎた。

「本日は終了いたします。ありがとうございます」

「どうもありがとう」

「明日からもよろしくお願いいたします」

私は頭を下げて社長室を出た。

「ふうー、緊張した」

とりあえず今日は何事もなく掃除を終えることができて一安心だ。

次の仕事のため移動しようとしたとき、こちらに向かつて歩いてくる女性と目が合った。

長い髪を一つに結い上げた彼女は背が高く、パンツスーツを着こなしている。顔がすごく小さくて、バッチリと隙のないメイクをしていて、まるでテレビに出てくる女優さんみたいだ。

いつも河原社長の隣を歩いている秘書の新田理香子さんだ。

「おはようございます」

クールな表情のまま挨拶をしてくれた。

「おはようございます。本日から社長室の清掃を担当する宮本と申します」

「朝早くからお疲れ様です」

丁寧な頭を下げると、ヒールを鳴らして秘書室へと入って行った。

（美人で仕事もできそうで憧れるな）

私はその足で次の掃除場所へ向かった。午前中はトイレを中心に掃除をする。まずは、休憩室があるフロアの女子トイレだ。

「ゆめちゃん、お疲れ様」

私がトイレに入ると、先輩清掃員が声をかけてきた。

「皆さんお疲れ様です！」

「社長さんはどうだった？」

「やっぱり怖いのか？」

トイレの掃除をしながら、皆が興味津々に話しかけてくる。

「仕事に集中してほとんど会話をしなかったんですよ。だから、怒られることもありませんでした」

「あらよかったじゃない。ここだけの話だけど、社長って顔が怖いよね。笑ったところを見たことがないのよ」

「わかるわー。社長という肩書きを抜きにしても、ちょっと近寄りがたい感じよね」

「浮いた話を聞かないのも、そのせいなのかしら」

自由に好きなことを言っているの、私は曖昧な笑顔を浮かべた。

（たしかに外見は無表情で怖い感じがしたけど、ちゃんと話をしてみたら案外いい人なんじゃない

かな？)

根拠はないけれど、今日挨拶をした印象ではそう感じた。

でもきつと私は、これからも社長と挨拶以外の会話をすることはないだろう。それでも自分に与えられた清掃という仕事をしっかりと頑張っていきたい。

今日からはカワラ食品の契約社員となったため、午前中の掃除が終わると休憩を取り、その後はパソコンに向かってシフト管理表を作る。野崎マネージャーに教えてもらいながら即戦力になれるように奮闘する。

「さすが若い子は覚えるのが早くて助かるわ」

野崎マネージャーが私を見てニツコリと笑った。

夕方十六時まで仕事をして退社した。何となく祖母の様子が気になり、おばに電話をする。

『病院から特に連絡がないから、元気で過ごしているんじゃないかしら』

おばの曖昧な返事を聞き、ちゃんと気にかけているのかと心配になってくる。病院のスタッフが祖母の面倒を見てくれるだろうけど……

でも今はおばの言葉を信じるしかない。スマホをカバンに入れ、居酒屋のアルバイトへと向かう。カワラ食品で働くようになってから、アルバイト先の居酒屋も変えた。すぐに仕事に行けるようにするため。時間は夕方十七時から二十三時まで。これなら終電にも十分間に合うし、深夜手当もつくから効率的に稼ぐことができる。

今のアルバイト先は、『味噌晩菜』という味噌料理中心の居酒屋でカワラ食品の系列店舗だ。料

理にはカワラ食品の味噌を使っていてどれもとても美味しい。

味噌汁はもちろん、味噌田楽や、味噌おでんなど。まかないにもカワラ食品の味噌を使った料理がよく出てくる。

「お疲れ様、ゆめちゃん」

店に到着しバックヤードに入ると、店長の板倉^{いたくら}さんが声をかけてくれた。彼はいつも明るくて気さくに話しかけてくれる。従業員のプライベートも考慮してシフトを調整してくれる頼りになる店長だ。

「今日も忙しいけど、よろしくね」

「了解です」

私はすぐにブラウスとジーンズという制服に着替えて、腰にエプロンを巻く。胸には名札をセツトした。

「三番テーブルをお願いします」

「了解です」

元氣よく返事をしてドリンクを運ぶ。

指示されて向かったテーブルには名前は知らないが、頻繁に店に来るサラリーマンが座っていた。「いつもありがとうございます。生ビールをお持ちいたしました」

サラリーマンは恥ずかしそうにメガネをクイツと中指で上げて、ペコリと頭を下げる。

私はいつも来てくれる感謝の思いを込めて笑顔を浮かべた。

それから私は、昼は清掃の仕事、夜は居酒屋のアルバイトという生活を送っていた。

社長と話をする機会はほぼなかったが、私の掃除に対して何か言ってくることもなく、静かな空間の中で掃除をして帰る日々が続いた。社長の担当になってそろそろ一ヶ月だ。

いつものように掃除に向かうと、今日はめずらしく社長の扉が開いていた。声をかけようとしたとき、中から話し声が聞こえてきた。

「おはよう。今日は天気がいいな」

（誰と話をしているのかな？）

秘書室の前を通ってきたけど、まだ秘書の新田さんは来ていないようだった。

私の他に清掃員がお邪魔しているのかな？ そんな申し送りはなかったと思いつつ、扉の隙間から中を覗いてみた。河原社長以外に人はいない。

「太陽の光をたっぷり浴びるんだぞ」

なんと、社長が観葉植物に水をあげながら話しかけている。

「元気いっぱいに育てよ」

身体が大きくて顔つきが怖いと言われている人なのに、小さな植物に話しかけているなんて。意外な姿に胸がキュンとしてしまった。

（あんな一面もあるんだ。可愛すぎる……！）

すっかり入室のタイミングを失っていると、水をあげていた社長がふと視線を動かしたので目が合ってしまった。

（ど、どうしよう）

社長はいつも通り無表情なままこちらに向かって歩いてきた。慌てて逃げようとするが、バランスを崩して倒れてしまい、その反動で社長の扉が全開になる。

ビクビクしながら顔を上げると、彼は私を見下ろしている。

「おはようございます」

「覗き見をしていたのか？」

「ち、違います……！ 植物に話しかけている姿に……トキメキ……いやっ、あのっ……」

社長は眉間に深くシワを刻んだまま、座り込んでいる私に手を差し出す。

「あ、ありがとうございます」

おそろおそろ社長の手をつかんで立ち上がる。至近距離で鋭い視線を向けられて、私は怖気づいた。

「本当に申し訳ありません。覗くつもりはなかったのですが、話し声が聞こえてきたので、どなたかいちつしやっているのかと……入室したら失礼かと思って様子をうかがっていたんです」

無言の圧がすごい。

「……河原社長って、お優しいのですね」

どんな言葉をかけたらいいのかわからなくなってしまい、つい思ったままのことを口走ってしまふ。

「は？」

私の言葉に社長は頬を真っ赤に染めた。

（社長が照れる姿なんてめずらしい。こんな表情をするなんて……!）

「観葉植物、お好きなんですか？」

「十歳年下の妹がいるんだ。彼女が外国に留学するときしばらく離れるからと、『私だと思って大切に育ててね』と超越したんだ。それで、いつも声をかけながら水をやっていた」

「そうだったんですね」

思わず質問してしまったが、社長は丁寧な答えてくれた。

「きっかけは妹だったが、いつのまにか観葉植物もいいものだと思うようになって」

「実は私も観葉植物が好きなんです。見ているだけで癒やされますよね。でも、日当たりの条件だとか、株分けだとか、花を咲かせるにはお手入れが難しくて。ここにある観葉植物は青々としていて愛情をかけてもらっているんだなと思っていました」

大好きな観葉植物についてだったので、思わず言葉数が多くなってしまった。

私も部屋を植物でいっぱいにしてみたいが、金銭的に余裕はなく、丁寧に世話をする時間もないので、一つしか置いていない。

「余計なことを話してすみません。お掃除に入らせていただきます」

恥ずかしくなった私は慌てて社長室に入り、掃除を始めた。

掃除中いつもより視線を感じる気がして、チラリと社長の方向を見ると何度も目が合う。

「何か……？」

「宮本ゆめさん……だったね」

「はい……」

余計なことを話すぎたので、叱られるのではないかと身体を震わせる。

「そんなに怖がらないでくれ。毎日顔を合わせているのに話をしたことがなかったから、観葉植物の話で盛り上がれて俺も嬉しかった」

優しく包むような声で語りかけられて、ドキリとする。

（社長の声って、低くてよく通る声で心地がいい。イケボってやつだ）

怖そうだからあまり関わらないでおこうと思っていたのに、一気に心が奪われていく。

（この感情……何だろう）

「緑は癒やされる」

「そうですね。眺めているだけでリラックスできますし」

「ああ。実は長期出張のとき、水をやれなくて心配していたんだが、もしよかったら宮本さんに植物の世話をしてもらえないだろうか？ 俺の不在時にも入室できるように話はつけておくから。もちろんその分の手当は支払わせてもらう」

たった三つの小さな観葉植物だし、お安い御用だ。

「わかりました。実は私も社長が不在にされているとき、植物のことが気になっていました。追加の手当なんて結構です」

私がつこりと笑うと、社長はまた頬を赤く染めた。

「ありがとう。この子達も心強いと思う」

（擬人化してる……！ やっぱ社長って可愛い一面もあるんだ）

「安心だ。数が少ないので専門家に頼むのもどうかと迷っていて」

「お任せください」

社長が大切にしている観葉植物のお世話を任せてもらえるなんて嬉しい。大事にお世話させてもらおう。

*

社長室の担当になって三ヶ月が過ぎた。七月に入り、太陽の日差しがますます強くなっている。

私は社長が長期出張するたびに、植物のお世話をさせてもらっていた。

水をあげて、枯れてないかチェックする程度だったが、役に立てて光栄だ。

「おはようございます。今日も皆さん元気そうですね」

観葉植物に話しかける。もちろん返事はないけれど、青々とした葉っぱは声をかけられて喜んでるように感じた。

ふと、いつも社長が座っている椅子を見る。主不在の椅子は、こころなしかぼつんと寂しげに感じられた。

（社長がいらないのが寂しい……え？ 私、なんでそんなことを考えているんだろう？）

私は自分の頭に浮かぶ感情を払うように、首を振った。

（明日になれば社長が帰ってくる。しつかりしないと）

次の日、久しぶりに社長が出勤するとあって、私は張り切って出社した。昨日も遅くまで居酒屋のアルバイトだったから、朝早く起きるのは少し大変だったけど、社長に会えるのだと思うと不思議と足取りは軽くなった。

「失礼します」

掃除道具を持って中に入り、いつものように作業していく。でも無音だった最初の頃とは違い、社長が話しかけてくるようになった。

「植物の調子がよさそうだ」

「ええ。社長がいらっしやらない間もとても元気そうでした」

「宮本さんが愛情を込めて接してくれたおかげだ。面倒を見てくれてありがとう」

応接セットのテーブルを拭きながら社長に視線を向けると、やっぱり無表情だがかすかに笑っているような気がした。

「お役に立てて光栄です」

嬉しくなり微笑み返すと、社長は咳払いをして目をそらす。

(照れているのかな)

たわいない話をしながら作業をしているうちに、あっという間に十五分が過ぎてしまった。

「以上で終わりです。何か気になることはありませんか？」

話しかけると社長が近づいてきた。手には紙袋を持っている。

「今回はパリに行ってきたんだ。お土産をどうぞ」

「いつもありがとうございます！ただ、気を遣わないでください」

観葉植物の世話を任されるようになってから、社長は出張のたびにお土産を買ってきてくれるようになった。でも、毎回出張土産をもらっていてはさすがに気が引けてしまう。

「トリュフチョコだ。甘いものは嫌いかな？」

遠慮して断ると悲しそうな顔をされてしまう。

(せっかくのご好意だし、いただくことにしよう)

「大好きです。大切に食べさせていただきます」

一度は断ったものの、やはり嬉しい。社長が買ってきてくれる物はいつも可愛かったり、美味しかったりする物ばかりで、内心楽しみになっていた。

もちろん、物をもらえるから喜んでいいるのではない。出張中で忙しいはずなのに、私のことを思い浮かべて選んでくれたことが嬉しいのだ。

「いつももらってばかりですし、本当にこれからは大丈夫ですので」

「植物の様子を見てもらっているお礼もあるが、宮本さんの嬉しいような顔を思い浮かべるとついお

土産を購入したくなってしまうんだ」

そう言っ見てつめられ、じわじわと頬に熱が集まってきた。

まるで時の流れが止まったかのようで、一瞬、呼吸をするのを忘れてしまう。

(強面だけど瞳の奥はすごく優しい。河原社長ともっといろいろなことを話してみたい)

しかし、朝の掃除の十五分間しか会うことができない関係だ。時間も限られているうえ、仕事中に雑談ばかりするのも気が引ける。

(社長はきつと、噂と違って親切なんじゃないかな。だから私だけが特別だと勘違いしちゃいけない)

しばらく見つめ合っているとドアをノックする音が聞こえた。

ハッとして私は河原社長から一歩離れた。

社長が返事をする、新田さんが中に入ってきた。

「新田、どうかしたか？」

「お急ぎの資料があるとおっしゃっていたので、早くお渡ししようかと」

(新田さん、いつ見ても知的で仕事ができそうでかっこいいな)

「ありがたいが、清掃が終わった後で問題ない」

「申し訳ございません」

「気を遣わせてしまつて悪かった」

社長が業務の指示をしている姿を見たのは初めてだ。仕事だから仕方がないのだろうが、厳しい

ことが伝わってきた。でも、社員を気にかけていることが伝わってくる。

新田さんは表情一つ変えることなく河原社長を見ている。

仕事でいつも一緒にいる彼らには、二人にしかわからない空気感があるのだろう。少し羨ましい。「かしこまりました。ではのちほど」

新田さんが社長室から出て行く途中で、ちらりとこちらに視線を送ってきたので、私は出張土産を背中に隠して頭を深く下げた。

再び二人になると、河原社長は私に視線を移して目を細めた。他の人から見ると無表情に感じるかもしれないけれど、私にはすごく穏やかな表情に見える。

「チョコレートの感想、今度聞かせてくれ」

「ありがたういただきます。では、時間なので失礼いたします」

名残惜しかったが、私は一礼すると退室した。

（何か河原社長にお返しができないかな）

最近の気がつけば彼のことがばかりが頭に浮かんでいる。

（いけない。集中しなきゃ）

私は頭を振って気持ちを切り替えた。

夕方になり、清掃の仕事を終えていつものように居酒屋のアルバイトへと向かう。店に到着すると裏口にいつも来ているサラリーマンが立っていた。

目が合ったので頭を下げると、彼もちらつとこちらを見て会釈をした。

（何であんなところにいるんだろう？）

不思議に思ったものの、始業時間が迫っていたので中に入って着替えを済ませる。

「お疲れ様です、今日もよろしくお願いします！」

店に出て店長や先に来ていたスタッフに声をかける。

店内を見渡すと、今日も大盛況だ。

（今日も忙しくなりそうだな、頑張ろう）

アルバイト中も味噌料理を見ると、河原社長のことを思い出してしまった。

いつもお土産をもらってばかりなので何かお礼をしたい。

（河原社長に私が大好物の味噌焼きおにぎりを作ってみようかな。でもそんな庶民の食べ物をもらっても迷惑かな）

『カワラ食品』の味噌は、深いコクがあって本当に美味しい。

さすがに社長も味噌焼きおにぎりは口にすることがあるだろうけど、私にできるお礼を考えたとき、これくらいしか思いつかなかった。

（おばあちゃんの味噌焼きおにぎりは本当に美味しかったし、あれなら社長にも喜んでもらえるかもしれない）

居酒屋のバイトを終えて家に帰ると、朝にご飯が炊けるように炊飯器をセットして眠りについた。次の日の朝。

いつもより少し早く起きて、炊き上がった白米でおにぎりを握る。表面に味噌を塗り、焼き目を

つければ味噌焼きおにぎりの完成だ。

試食も兼ねて朝食として食べると、とても美味しい。

祖母が作ったほうが美味しいけれど、ちゃんと作れるように教えてもらっていたおかげでかなり似た仕上がりになっている。これならぜひ社長に食べてもらいたい。

そう意気込みながら味噌焼きおにぎりを袋に詰めたところで、急に不安がよぎる。

(やっぱり手作りのおにぎりをもらったって迷惑……かな)

迷いながらも私はおにぎりを袋に入れて会社に向かった。

——トントン。

「はい、どうぞ」

社長室のドアをノックをすると、中から社長の声が聞こえてくる。

「失礼いたします」

入室すると、忙しそうに仕事をしている姿が目に入ってきた。

社長は昨日と同じ色のネクタイをしている。いつもきれいにセットされている髪も少し乱れているし、もしかして家に帰れなかったのだろうか。

気になってじっと見つめていると、社長と目が合う。

「あの……失礼だったら申し訳ありません。もしかして、お家に帰られていないのですか？」

「なぜわかるんだ？」

「昨日とネクタイの色が一緒でしたので……」

私の指摘を聞いて社長はハツとした表情になり、パソコンのキーボードから手を離れた。

「緊急でやらなければいけないことがあって」

「そうだったんですね……。ちゃんと食事は摂られていますか？」

彼はこちらを見て一瞬黙り込んだ。

「そんなことまで気にかけてくれるんだな」

「おせっかいで申し訳ありません……」

なぜか社長のことが気になって仕方がない。心配になって思わず声に出してしまったが、社長からすれば余計なお世話だろう。

「立场上、たまにはこういうこともある。一度家に戻ってシャワーを浴びてこようと思っていたのだが、気がつけばこんな時間になってしまった。もう少ししたら家に戻るよ。臭うかもしれないからあまり近づかないでくれよ」

冗談めかした口調で言って笑っている。

(朝まで仕事をしていたら、大したものをお口にできていないんじゃないかな)

焼きおにぎりを渡すか悩んでいたけれど、やっぱり渡そう。私は掃除を終えると社長に紙袋を差し出した。

「あの、よかったですぞ」

社長は驚いた表情で紙袋を見つめている。

「これは？」

紙袋に注がれていた視線が私に移される。

「いつもお土産を買ってきてくださるお礼をしたいと思ひまして」

「そんなこと気にしないでいいんだ。あれは観葉植物の世話をしてくれるお礼だから」

「でも、それ以上にいただいているので……」

彼は眉間にシワを寄せながらも受け取ってくれた。

「実は小さい頃から『カワラ食品』の味噌のファンなんです。地元が神奈川で、河原家のご実家の近くでして。祖母がよく私にこの味噌を使って焼きおにぎりを作ってくれました。それが私の大好物で。お口に合わないかもしれませんが……」

そう言いながらもすでに渡したことを後悔している。こんな庶民の食べ物をもらって嬉しいわけがない。

「……手作りの物をもらうなんて気持ち悪いですね。捨てていただいても構いません。でも、やつぱりもつたいないので私のお昼ご飯にします」

手を伸ばして紙袋を奪い取ろうとすると、ひょいと上に持ち上げられた。

「ありがとう。とても腹が減っていたんだ。今、食べさせてもらうよ」

「えっ」

社長はそう言いながら紙袋の中に手を入れておにぎりを持った。

大柄の彼が持つと小さく見える。

(いつもよりは大きめに握ったつもりなんだけど……)

そのまま社長はおにぎりを包んでいた包装を剥がして口に運ぶ。目の前で味の審査をされているような気持ちになり、いたたまれなくなる。

「ものすごくうまい」

「……ありがとうございます」

あつという間に一つ目を食べ終えて、二つ目を手に取った。心なしか社長の目がキラキラと輝いているように見える。

二つ目もすぐに食べ終えてしまった彼は、こちらに視線を向けてきた。

「本当に美味しかった。満たされたよ。ありがとう」

「喜んでいただけてホッとしました」

おにぎりも渡したし、これ以上ここに留まっているわけにはいかない。

「宮本さん」

帰ろうとしたところで、社長に呼び止められた。

「何かありましたか？」

「たまにでいい。俺におにぎりを作ってもらえないか？ もちろん食材は用意するし、会社のテストキッチンを利用してもらっても構わない。代金も支払う」

予想外のことを言われて、私はポカンと口を開けて立ち止まってしまった。

「無理なお願ひをしてしまつて申し訳ない……。宮本さんだって忙しいよな」

「あ、いえいえ。気に入っていただけたようで嬉しいです。また作って持ってきますよ。テスト

キッチンを借りるとか、材料を用意していただくとか、そんなこととしていただかなくても大丈夫です」

心を込めて作ったおにぎりを美味しいと言ってもらえただけで、すごく嬉しかった。

「それでは申し訳ない。光熱費もかかってしまう。それに炊飯器や道具も消耗してしまうだろう。まあ、後から請求してもらっても構わないが。ひとまずテストキッチンの使用許可を出しておくので、お願いできないだろうか？」

そこまで言われてしまえば断れない。雇い主からのお願いなので快く引き受けることにした。

「わかりました。では作らせていただきます」

「心から感謝する。毎日でも食べたいくらい美味しかった。とはいえ宮本さんの負担を増やしてはいけないな。金曜日に、三十分早く出勤することは可能か？」

「はい。朝食としてお召し上がりでしょうか？」

「ああ。これを食べたらい日の始まりにエネルギーがもらえる気がしたんだ」

社長は先ほどまで疲れた顔をしていたのに、今は頬にほんのりと赤みが差している。こころなか周りの空気も軽くなったように感じる。

（朝食なら本当は家で食べてから出勤したいんじゃないかな？）

後でシャワーを浴びてくると言っていたので、家が近くにあるのかもしれない。

「ご自宅はお近くですか？ もしご迷惑でなければお届けします」

「実は、俺の家はこのビルの最上階にある。最上階から三フロアは居住スペースになっている

んだ」

「そうだったんですか」

まさか社長がこのビルの上に住んでいるとは知らなかった。

「考えてみれば、テストキッチン是一人で利用するには広すぎるかもしれない。宮本さんがよければうちの台所を使うのはどうだろうか？」

「おにぎりくらい私の家で作って持つてきます」

「先ほども言ったが、光熱費や炊飯器などの消耗品も……」

同じことを何度か繰り返した結果、金曜日の朝、私は社長の家で焼きおにぎりを作らせてもらうことになった。

「白米だけで自身で炊いていたのは可能でしょうか？」

「それくらいはできる」

「よろしく願います」

社長のお役に立てるのが嬉しいと素直に思っていた。

*

金曜日になり、私は早起きをして社長の自宅にお邪魔するために家を出た。あくまでおにぎりを作るためだが、冷静になって考えてみたら男性の家で二人きりになるのだ。恋人がいたことのない

私は、男性の家に行くのも当然初めてだ。想像すると急に心臓がドキドキしてきた。

(最初に社長の家だと提案したのは私だし、しつかりしないと)

でも、オフィスの上に住んでいたなんて驚きだ。

いつもと同じルートで出勤し、会社のビルに到着する。

居住スペース専用の入口は、重厚な作りの自動ドアで、エントランスにはコンシェルジュが待機していた。

エントランスだけで、大人数を集めてパーティーできそうなくらい広い作りになっている。奥のほうには応接スペースまである。

(すごい！ 庶民の私が足を踏み入れるようなところじゃないな)

訪問先と名前をコンシェルジュに伝えようと、事前に連絡が入っていたようです。なりエレベーターホールに通された。

エレベーターも操作盤までピカピカに磨かれていて高級感がある。

緊張しながら中に進み、河原社長が住む四十二階のボタンを押す。

(わあっ、最上階だ)

静かで揺れを感じない箱で、あつという間に四十二階まで到着してしまう。

最上階には玄関の扉がたった一つしかない。

震える指でインターホンを押す。

すぐにドアが開き、河原社長が出迎えてくれた。先に出勤準備を終えていたのか、いつものよう

にスーツ姿だ。

「おはようございます」

「おはよう。待っていたよ、どうぞ」

よく磨かれた白い玄関に足を踏み入れる。

社長が用意してくれたふかふかのスリッパを履き、まっすぐ進んでいくと三十畳ほどあるリビングがあった。

ほぼ全面が窓だ。しかも一つ一つがとても大きい。

その窓からはレインボーブリッジまで見えていて、まるで高級ホテルのようだ。

(こんな広いところで一人暮らしをしているなんて、さすがは大企業の社長……！)

「すぐ下が会社だなんて、いつでも仕事場にいるようで落ち着かないんだが、何かあったときにすぐに対応できるから楽だね」

「そうだったんですね」

ソファの前には、映画のスクリーンかと思うほど大きなテレビが設置されていた。

右側にはキッチンがあり、ダイニングテーブルセットが置かれている。

その隣の棚に小さな観葉植物が置かれていた。

(あの観葉植物も妹さんからのプレゼントなのかな)

「では、早速キッチンをお借りします」

キッチンはほとんど使われていないようで、コンロもシンクも綺麗なままだ。調理台も広々とし

ていて、こんな素敵なところで毎日料理ができる生活なんて憧れてしまう。

社長は約束通り準備してくれていたようで、炊飯器にはしっかりとご飯が炊かれていた。

私はいつもより大きめにおにぎりを握り、味噌を塗りつけると、フライパンにアルミホイルを敷いて焼く。

しばらくすると味噌が焼けた香ばしい香りがしてくる。

（おにぎりだけじゃもの足りないかな）

「自宅に豆腐とネギがあつたので持ってきたのですが、味噌汁も作っていいですか？」

「もちろんだ。材料費は後で請求してくれ」

「いえ、これは私からのお礼です」

少しだけ強い口調で言うと社長は納得したように頷いた。

料理が完成したことを伝えようと一緒に食べてほしいとリクエストされ、私は社長の目の前に座った。

味噌焼きおにぎりと味噌汁だけの質素な朝食だが、彼は美味しそうに食べている。

身体が大きいのに、まるでわんぱくな少年のようだ。

「すごく美味しい」

「味噌がいいからだと思います」

「それもあるだろうが、宮本さんが上手だからじゃないか？」

たわいない内容なのに、相手が社長だと話しているだけで楽しい。

怖い人だと言われているけれど、上から物を言うようなことはないし、おにぎり一つ作るだけでもこんなに喜んでくれる。それに、私に不利益がないようにきちんと対価を払おうとしてくれる。

（きっと河原社長は、恋人や奥さんにもすごく優しいんだろうな）

食事の準備や洗濯など、一つ一つの家事に対して、必ずありがとうと言ってくれそうだ。

こうして朝からともに食事をしていると、まるで夫婦みたいでつい想像が広がってしまった。

（私、なんてことを考えてるんだろう）

気持ちを切り替えようと頬を軽くはたいしていると、社長がこちらを見て微笑む。

「これから金曜日が楽しみで仕方がない」

「そんなこと言ってくれるのは社長だけです。こうして自分の作った物を美味しいと食べてもらえることって嬉しいものですね」

嬉しい気持ちを隠しきれずに笑顔で返すと、社長は驚いた表情を浮かべた後、真顔で見つめてきた。

「……食べてくれる人はいないのか？」

「恋愛らしい恋愛もしてこなかったんで、恋人もいませんし、料理を食べてくれる家族もいません」

余計なことまで話してしまったと私は顔が熱くなった。

社長がじっと私の顔を見つめていることに気がつき、恥ずかしくなって頭を下げた。

「変なことまで話してしまって……申し訳ありません」

「いや。話してくれてありがとう」

まさかお礼を言われるなんて思ってもいなかった。

(社長ってやっぱり優しく素敵な人だな)

一緒に過ごす時間が増えていくほど、自分の心が奪われていく気がする。気づかないふりをしていたけれど、私は河原社長のことを好きになりかけているのだろう。

でも、少し不安だ。だって、社長と清掃員だなんて、あまりにも身分が違いすぎる。間違っても恋をしてはいけない相手なのだから……

第二章

「宮本ゆめ……」

毎朝社長室に掃除に来てくれる可愛らしい人。

彼女が出て行った後は、部屋の空気がとても澄んでいるように感じる。掃除をして綺麗になったからだけではなく、彼女が明るい雰囲気を残してくれているのかもしれない。

こちらからのお願いで週に一回焼きおにぎりを作ってもらうようになった。

彼女には味噌焼きおにぎりのうまさに感動したからと伝えたが、それだけではない。宮本ゆめと関わりたいう下心があったからだ。

色白の肌に、二重が印象的な大きな目、長いまつ毛に小さな口。彼女に笑顔を向けられると、胸

が温かくなる。性格は明るくて気が利いて、人懐っこいところも可愛い……

外見も性格も魅力があつてまいつてしまう。

彼女のことを考えていると、ドアがノックされた。

「どうぞ」

入ってきたのは新田だった。

「先ほど依頼されていた資料ができたので、共有フォルダに入れておきました」

「ありがとう」

「今夜は会食がキャンセルになりましたが、他に何かご予約を入れましょうか？」

「久しぶりに店に視察に行こうかと思っている」

「お供してもよろしいでしょうか？」

「構わない」

彼女は頭を下げて社長室を出て行った。

俺は女性が苦手だ。大企業の一人息子として生まれた俺には、子どもの頃からいつも女性が近づいてきた。

俺の性格をろくに知りもしないくせに、『カワラ食品の息子』というだけで告白されることもあった。小学校から大学卒業までずっとそんな感じだった。

高校時代に一度だけ女性と付き合ったことがある。腰まで伸ばした綺麗な黒髪ストレートの女性

だった。ピアノが弾けていつも穏やかで、優しく笑っているところに惹かれて、彼女からの告白を受け入れた。

ところがある日、教室に忘れ物を取りに行ったとき、彼女が友達と『お金持ちの息子だから付き合ってるだけだよ』と話しているのを聞いてしまった。

『無駄に背が大きくていかついでしょう。私、ああいう人はタイプじゃないの』

彼女の言葉を聞いて俺は完全に心を閉ざし、そのせいでより一層、無表情に拍車がかかったのかもしれない。

三十歳を過ぎても一向に結婚しない俺のことを、母親はかなり心配している。

立场上、跡継ぎを残す必要があると考えて、何度もお見合いを重ねた。

だが、笑顔を作るのが苦手な上この容姿だ。お見合いはすべて失敗に終わった。

それでも母親は俺を何とか結婚させようとして、あれこれ縁談をもちかけてくる。

正直今は誰とも結婚する気がない。

現在三十二歳。

この年齢までろくに恋愛をしてこなかったんだ。今さら誰かと恋愛をして、夫婦になることは不可能に近いだろう。

そんな事情がある俺に対して、新田は色目を使ってこないのでもともと仕事がやりやすい。信頼している秘書だ。

その日、仕事が終わって系列店の居酒屋『味噌晩菜』に足を運んだ。

ここ数年は飲食業も業績を伸ばしており、抜き打ちでチェックに行くことも増えた。

店長以外のアルバイトは、俺が社長だということを知らない。もちろん会社のホームページには俺の名前と写真が載っているが、俺はほとんどメディアに顔を出さないで認知されていないはずだ。

そのほうが気づいたことを指摘しやすいから都合である。

店に入ると「いらつしゃいませ」と明るい声で迎えられた。合格だ。

「二名様ですね。こちらの席どうぞ」

案内されたのは二名がけのテーブル席だった。俺と新田は向かい合って座る。生ビールを注文して料理を何品か選んだ。

「お待たせしました。生ビール二つです」

聞き覚えのある声だと思つて視線を動かすと、そこにいたのは宮本さんだった。

目が合つて一瞬固まつてしまう。

「河原社長……お疲れ様です。新田さんもお疲れ様です」

「ここでアルバイトをしているのか？」

「はい。契約社員の副業は禁止されていませんよね？」

「ああ。問題ない」

夜遅くまで働いて朝早く掃除の仕事をしているのか。金が必要なのだろうか？

そんなに忙しい彼女に無理なお願いをして、おにぎりを作ってもらっていたのか。申し訳ない思

いが広がり、胸が痛んだ。

「まさかここで働いているとは驚きました」

新田が話しかけている。

「事情がありました……」

「今日は抜き打ちのチェックで来たんですよ」

「そうだったんですね」

「社長だということを知らない従業員もいるので、他の方には内密に」

「わかりました。ごゆっくり」

居酒屋で見る宮本さんとても明るくて笑顔が溢れていた。

自然と彼女のことを目で追ってしまいが、どのお客様に対してもとても対応がいい。

「……彼女はとても接客業に向いている」

「そうですね。アルバイトなんてもったいないですね」

「ああ」

そのうちに別の従業員が料理が運んできた。食べているうちに、いつの間にか宮本さんの姿は見えなくなっていた。

*

「ゆめちゃん、休憩に入っているよ」

「はい！」

店長に言われてバックヤードに入る。ロッカーに囲まれた部屋で、休憩用に小さなテーブルが置いている。

河原社長が視察に来ているなんて驚いた。しかも終業後のはずなのに新田さんが同席していた。仕事としてついてきているのか、それとも本当はプライベートなのだろうか？

二人はお似合いで、少し羨ましくなってしまう。

（やっぱり秘書として社長をサポートしながら働くなんて、カッコいいな）

今は祖母も入院して落ち着いているし、そろそろ私も正社員として働ける仕事を探そう。ダブルワークはやはり身体にも無理があるようで、ここ最近疲れが溜まっている気がする。

でも、自分にはどんな仕事が合っているのだろう、やれることは何なのだろう。

「ゆめちゃん、まかない」

「ありがとうございます！」

店長がまかないをもってきてくれたので、休憩室で食べさせてもらう。その料理が美味しいいったらありやしない。今日は味噌カツ丼だ。

食べようとしたときスマホに連絡が入った。北海道の夏江おばさんからだ。

『今大丈夫？』

「ちょうど休憩中だったので大丈夫ですよ。何かありましたか？」

『実はね……』

言いにくそうにしているので悪いことがあったのではないかとヒヤツとした。おばさんの言葉に注意深く耳を傾ける。

『おばあちゃん、二週間前に亡くなって、もうお骨になっっているのよ』

「え？」

一瞬、何を言っているのか理解することができなかった。あまりの内容に、信じられずに頭が真っ白になる。

次の瞬間、怒りが込み上げてきて、私は手に握りこぶしを作った。

連絡をしてこなかった理由がわからない。

少しでも冷静になろうと息を深く吐く。

「なぜもっと早く教えてくれなかったんですか？」

自分の声だと思えないほど低い声が出た。怒鳴ってしまいそうだったけれど、まずは話を聞こう。

『突然容態が悪くなって、亡くなってしまっ』

「そんなことを聞いているんじゃないです。なぜ連絡をしてくれなかったのかって聞いているんです」

『お葬式とかバタバタして忙しかったのよ。ようやく落ち着いたら連絡したの。遅くなっちゃってごめんなさいね』

大事なことを教えてくれなかったのに、おばさんに悪びれた様子はない。

『遅くなっちゃってごめんなさい』じゃないです！

あまりにもショックで私は思わず大きな声を出してしまった。

『お金、いくらかかったと思っているの。お金だけじゃないわ、手間もすぐかかった。何度も病院に呼び出されたり洗濯物を洗ったり。火葬だってお金がかかったのよ。面倒を見てやったお礼はないわけ？』

悲しみを通り越して感情がぐちゃぐちゃだ。まだアルバイト中だというのに涙がポロポロと溢れてきた。

『うちも余裕がないけど最低限の葬儀をさせてもらったわ。そうね……分割でもいいから五十万円振り込みなさい』

私はあまりにもショックで言葉が出てこなかった。

『私の母と同じお墓に埋葬したから。こちらに来ることがあったらお参りしてあげたらいいんじゃないの？』

「……ひどすぎます」

『誰に向かって言っているの？ 今まで面倒を見てあげたんだから感謝の言葉の一つや二つぐらいないのかしら。本当ならもっとお金を請求したいところよ。感謝もできないひどい娘に育ったのね。まあそういうことだから。じゃあ』

ツーッー。

電話が切れてしまった。

（おばあちゃんが……死んじゃった……）

「ゆめちゃん、ごめん。ちょっと混んできたから手伝ってもらえるか……え？ どうした？」
休憩室に入ってきた店長が泣いている私を見て驚いている。

「……祖母が亡くなってしまったって」

「そうだったのか。お葬式はいつ？ 休みにしてあげるから」

「もうお骨になってしまったようです……」

店長は眉間にシワを寄せ、何とも言えない表情をした。

「いろいろ事情があるんだね……」

「……ごめんなさい。お店、混んでいるんですよ。出ます」

料理を運ぼうと立ち上がったが、足元がふらついて上手く歩けない。

「無理はしないで」

何とか涙を我慢して、ホールへと向かった。

たしかに店内は満席で、注文が厨房にたくさん貼られていてスタッフ全員が忙しそうにしていた。
今ここで穴を開けるわけにはいかない。

気持ちを引き締めて料理を運ぶが現実だと受け止めることができず、気を抜くと倒れてしまいうだった。

「ゆめ」

不意に名前を呼ばれて振り返ると、常連のサラリーマンだった。

名札に「ゆめ」と書いてあるが、気安く名前を呼ばれる間柄ではない。

「会いに来たよ」

「……ありがとうございます」

「今日は笑顔を見せてくれないんだね。冷たいな」

一方的に親しげに話され、正直気持ちが悪いと思った。

感情がぐちゃぐちゃになって涙が流れてきてしまう。その様子に気がついた店長がさっと近づいてきて、私に耳打ちをした。

「帰ってもいいよ」

「こんな忙しいですし、大丈夫です」

「さっきから様子を見ていたけど、働ける状態じゃない。まずは休んで、元気になったらまた頑張ってくれば大丈夫だから」

「申し訳ありません」

私はバックヤードに戻り、すぐにエプロンを外して帰宅することにした。

外に出ると蒸し暑い。騒がしい歓楽街なのに、私だけが無音の中にいるようだった。

胸のあたりが鋭利な刃物で切りつけられているように痛くて、どんどん呼吸が荒くなっていく。

大事なおばあちゃんと、最後の別れをさせてくれないなんて……。どんなに大変でも、私のそばで暮らしてもらうべきだったのかもしれないと、後悔の念が襲ってきた。

貧乏だったけれど節約をしながら二人で頑張って生きてきた。

私には絶対に幸せになってほしいというのが祖母の口癖で、その幸せになった姿を見せたいと頑張ってきたのに……

涙を止めようとしても次から次へとこぼれてきて、頬を濡らしていく。

「体調が悪いたら送ってあげるよ」

突然男の人の声が聞こえて振り返ると、常連のサラリーマンが立っていた。いつの間に店の外に出てきていたのだろう。

「結構です」

「元気がないから心配なんだ」

そう言われ、腕をガッチリとつかまれてしまった。

（どうしてこんなときに絡んでくるの？）

「一人で帰れるので大丈夫です！」

「ゆめ、恥ずかしがらなくていいんだよ」

「恥ずかしがってなんかいません！ 迷惑だと言っているんです」

私が強い口調で言っていると、彼は驚いたように目を見開いた。ものすごく傷ついた様子だったが、すぐに優しい笑顔を向けてくる。でも、瞳の奥は笑っていない。

「ごめんね。僕が傷つけるようなことをしてしまったんだね。守りきれなくてごめんね。ちゃんと大事にするから、まずはゆっくり二人で話をしよう」

この人は何を言っているのだろうか？

いつもお店に来ているただの常連だと思っていたのに。そういえば、前に店の裏口に立っていることもあった。今も何か勘違いしているのか、よくわからないことを言っている。全身が恐怖心で包まれる。

こういう場合、どう対処したらいいのだろう。

「ゆめ、さあ……家に一緒に帰ろうか。ゆめはオレンジ色が好きなんだよね。だって部屋のカーテンもオレンジだもん。僕も好きだよ、オレンジ色。結婚したら絨毯もオレンジにしようか」

（部屋に来たことがないのに、なんでカーテンの色まで知っているの……？）

「さあ、行こう」

「……大丈夫です。失礼します」

帰ろうとすると、反対の手首もキュッとつかまれた。

「もう二年だよ。付き合いが長い僕に頼ってよ」

「……二年？」

「ほら、二年前のあのとき助けてくれただろ」

そう言われて、ふと記憶が蘇ってきた。

この店でバイトを始めたばかりの頃、帰り道でゴミ袋の上に倒れているサラリーマンを見かけた。心配で近寄って声をかけると、その人は唇から血を流していた。話を聞くと、襲われそうになっている女性を助けようとしたら殴られてしまったのだという。

放っておくことができず、タクシーに乗せて近くの病院まで送り届けた。

『お礼がしたい』と言われたが、私は大したことをしていないからと断り、その場を去ったのだ。
「あれは、運命の出会いだったんだよ」

「違います……！」

「ゆめ、早く一緒になろう」

「やめてっ」

サラリーマンは私を自分のほうへと引き寄せようとしている。

（私の部屋のカーテンの色まで知っていたし、もしかして、ストーカー？）

もしそうだとしたら突き放すようなことを言ったら、逆上させてしまうかもしれない。

考えすぎかもしれないけれど……怖い。私は全身に震えが走っていた。

「宮本さん」

声が聞こえて振り返ると、そこに立っていたのは河原社長だった。

「おい、嫌がつているだろう。その手を離せ」

「俺のゆめだ。絶対にこの手は離さない」

サラリーマンの目の色が変わった。

社長が私に視線を向けたので、こんな人知り合いじゃないと伝えようと必死で頭を左右に振る。

「いいからその手を離せ」

身体が大きく声も低い河原社長が睨みつけると、ものすごい迫力がある。

「宮本さんは俺の大事な人だ」

「何だって……！」

サラリーマンの息が荒くなっている。

「うるさい！ 僕のゆめなんだああああ」

急に大きな声で叫ぶと、私の手を放し、社長に向けて手を振りかざした。どこから取り出したのか、その手にはナイフが握られていた。

「河原社長！ 危ない」

私が声を出すのと同時に、社長はサラリーマンの手首を強く握った。

「誰かのことを好きだと思いう気持ちは素晴らしい。しかし、一方的ではいけないんだ。冷静になって考えてみる」

「……つく」

「こんなところで犯罪者になってしまったら、君の人生はめちゃくちゃになってしまうんだ。君にしかできないことが絶対にある。彼女のことは残念ながら諦めてくれ」

その言葉に反応して、サラリーマンは再びナイフを振りかざそうとする。

「うりゃああああ」

社長はサラリーマンの手首をさらに強くつかんで捻った。ナイフが手から落ちる。

「警察に連絡してくれ」

新田さんへ指示を出す。

連絡を終えると、彼女は震える私の背中をさすってくれた。